

●優秀賞

俳句で学校づくり

～俳句づくりと全校俳句大会の

実践を通して～

鳥取県鳥取市立美和小学校 みたにゆうじ
三谷祐児



1 はじめに

(1) 児童・保護者・地域の実態

本校は鳥取市郊外に位置し、周囲には美しい田園風景が広がる農村地帯である。保護者・地域は学校教育に対して協力的であるが、遠慮がちな面も見受けられる。本校児童数は150人。皆純朴で素直。与えられた課題には黙々と取り組む。しかし、どの子もおとなしく積極性に欠ける。そういう地域性を反映してか、いつしか「自信と活力に満ちた児童・生徒の育成」が本校を含む校区の合い言葉になった。

(2) 特色ある学校づくりへの思い

子どもたちに「自信と活力」をみなぎらせた、どの子にもやればできたという自信や元気で澁刺と活動する力を身に付けさせたい、私は心からそう願った。

平成27年4月、私は教員人生2年を残して5年ぶりに小学校に復帰した。残された時間は2年間しかない。何ができる？ そのとき思い描いたのは「俳句で学校づくり」ということだった。子どもが自在に俳句を作り、保護者も地域も句会を楽しみ、句や歌が校区の中に当たり前にある教育風土を夢見た。現在、全国には俳句づくりを推進している学校は多くあり大変喜ばしいことだ。俳人と呼んで俳句ライブを行っている学校もある。しかし、俳句づくりもさるこ

とながら句会を学校の特色として実践している学校は少ないであろう。私は句会を通して、語彙を増やし豊かな感性を磨くとともに、家庭に団らんの機会を取り戻し、保護者地域を巻き込んで、子どもたちに「自信と活力」を獲得させたいと考えた。

(3) 研究主題について

表題の「俳句」という言葉は、「俳句、川柳、短歌、標語、児童詩、作文等」の総称として使用している。これらの意欲的な創作活動や積極的なコンクールへの応募、そして保護者・地域を巻き込んだ校内俳句大会の実施を通して特色ある学校を創りたいと考えた。

これから述べるのは、平成27年度4月から平成28年10月までの1年半に渡って行ってきた「俳句で学校づくり」の研究実践記録である。因みに、私を始め本校教職員全て俳句は素人である。結社や〇〇句会等に入っている者は誰一人いない。しかし、俳句のプロがいなくても「俳句で学校づくり」はできるのである。いないほうが面白いとも言える。この実践を通して、どんな学校でもこうすれば「俳句で学校づくり」ができることを示したい。

2 目指す児童、保護者・地域の姿

研究主題に迫るために、次のように目指す児童並びに保護者・地域の姿を設定した。

- ①自然の美しさや家族の温かさに触れ、心が動かされたことを短時間で俳句や短歌等に表現できる児童。
- ②自ら考え、意欲的に詩歌に関する調べ学習をしたりコンクールに応募したりする児童。
- ③日本の文化に親しむとともに、句会を楽しみ、友達の作品の良さを認め合う児童。
- ④「校内俳句大会」の取組を理解し、児童のがんばりを認めようとする保護者・地域。
- ⑤ノーマディアデーに合わせ、テレビを見たりゲームをしたりしないで、和気藹々とファミリー句会を楽しむ家族。

3 研究の実践

1年半に渡る実践を概括すると、次の3期に分けることができる。

- ①第1期 「慣れる時期」 平成27年4月～平成27年8月
俳句や短歌の創作や句会の仕方に「慣れる時期」である。
- ②第2期 「気づく時期」 平成27年9月～平成28年3月
実際に全校俳句大会を実施し、その楽しみに「気づく時期」である。
- ③第3期 「高める時期」 平成28年4月～現在
感動を伝えるための表現意識や全校俳句大会の質を「高める時期」である。

(1) 第1期「慣れる時期」の実践について

校内俳句大会を実施したくても作品がないことには俳句大会は実施できない。まずは、児童が俳句や短歌の作品を抵抗なく作る力を身に付けさせたいと考えた。お題を与えられたらすぐに創作できる力を習得させたいと考えた。そのためには「習うより慣れる」が大切であり多作を心がけさせた。

俳句づくりは、本校の児童は回数こそ多くはないが以前から取り組んでいたため、比較的容易に取り組むことができた。

平成27年度は、毎日13:50～14:00までの10分間をチャレンジタイムに設定して基礎学力の定着を目指してきた。金曜日は100マス作文に取り組み、俳句や川柳を作る時間に当てた。この毎週の積み重ねにより、子どもたちは次第に俳句や短歌の創作に慣れてきた。また、発達段階に合わせて、俳句上達のコツや技法、特に取り合わせを教えた。子どもたちは、「ああ、俳句って簡単にできるんだ」という気持ちを抱いたことと思う。5分もあれば5句6句と次々に作り上げる子どもが増えていった。

また、句会は東京書籍6年の教科書「句会を開こう」のクラス句会の手順に従って行えばよいことを先生方に指導した。「句会は日本が世界に誇るコミュニケーションツールである」ことを先生方に言い続け、やがて全クラスで句会が実施されるようになった。句会で大事なものは、国語の視点も大事ではあるが、学級集団づくりの視点である。授業で仲間づくりを進める視点を大切にしながら句会を行うように指導した。

4月当初、平成27年度は、コンクールや大会で60人以上の入賞者を出すことを保護者や地域に向けて宣言した。7月を終え、詩歌等のコンクールに入賞した児童は3人だった。

(2) 第2期「気づく時期」の実践について

平成27年9月2日（水）、満を持して第1回全校俳句大会を実施した。全校俳句大会とは、全児童、全家族、全教職員が参加する俳句大会のことである。そのねらいは、「2 目指す児童、保護者・地域の姿」に示したとおり「④児童のがんばりを認めようとする保護者・地域」「⑤和気藹々とファミリー句会を楽しむ家族」である。

全校俳句大会の手順は下記のとおりである。

- ① 各児童が作品づくりをする。（投句）
- ② 各クラスで句会を行い代表の句を選ぶ。（句会1）

- ③ 全校で30句になるように調整しB4版1枚にまとめる。(清記)
裏面にはファミリー句会の方法や感想欄を記載。
- ④ テレビを見たりゲームをしたりしないで、ファミリー句会を行う。(句会2)
- ⑤ 学校で回収し集計する。
- ⑥ 給食時間の校内放送で成績を発表する。(披露1)
- ⑦ 学校だよりで成績を発表するとともに賞状を授与する。(披露2)
- ⑧ 写真入りで作品を職員玄関に掲示して称揚する。(披露3)

保護者の反応はどうだったのか。

全校俳句大会に参加した人数は291名、ファミリー句会の平均時間（ノーメディアタイム）は23分という結果だった。

奇しくも、全校俳句大会を実施するその日の日本海新聞に、大伴家持大賞の児童・生徒の部に応募した1年生の短歌「あさがおのつぼみがかいがらみたいですあしたはきっとむらさきのいろ」が大賞を受賞するというビッグニュースが掲載されたのである。どちらも「俳句で学校づくり」を印象づける出来事であり、第1回全校俳句大会は大いに盛り上がった。

このことは、保護者の次のような感想からも理解することができた。

- ・様々な感性の作品を見させてもらって、素晴らしい取り組みをされていると思った。
 - ・とても新鮮な気持ちになった。子どもたちも一生懸命選んでいました。次回が楽しみです。
 - ・いつもと違うノーメディアデーの過ごし方ができました。
 - ・家族で一つのことを一緒にする時間をもつことはとてもよいと思いました。等々
- しかし、次の表のような意見や要望の声も上がり改善を試みた。

つまり、第1回目は句会を第1水曜日に限定したが、2回目からはその期間を約1週間と延

意見や要望	具体的な改善策
・ファミリー句会の日を水曜日だけにすると時間が少ないし、水曜日に用事があつたら家族で楽しめない。土日はさむようにしては？	・句会の期間を、水曜日～日曜日までとして期間を長くする。
・小さな子も楽しめるように、振り仮名を振ってほしい。	・次回から振り仮名を振る。
・字を大きくしてほしい。	・A3版に拡大する。

ばした。また、選句用紙はB4版ではなくA3版の用紙に文字を拡大するとともに振り仮名を振って持ち帰らせることにした。そうしたところ、2回目以降は形式的な面での意見や要望はなくなった。

選句用紙

選句用紙の裏面

第2期は、全校俳句大会を積み重ねながらいろいろと改善を試み、よりよい俳句大会になるように試行錯誤を繰り返した期間であった。この第2期に行った校内俳句大会は下記のとおりである。

月	俳句大会	内容 等
9	第1回	全学年、クラス代表による句会。3句を選句。
10	第2回	全学年、クラス代表による句会。3句を選句。
11	第3回	全学年、クラス代表による句会。3句を選句。
12	第4回	全学年、クラス代表による句会。3句を選句。
2	第5回	上学年の部、下学年の部。クラス代表による句会。3句を選句。
3	第6回	6年、4・5年、下学年の部。クラス代表による句会。3句を選句。

第4回の校内俳句大会を終えたところから、その内容について何人かの保護者からある意見が寄せられるようになってきた。それは、「学級代表となる児童は何回も選ばれるが、我が子は選ばれず1回も載らない。何とかありませんか」「全校で実施すると上学年の児童がほとんど入選してしまい、下学年の児童が入らない。どうにかありませんか」という意見だった。

全校で実施した場合、入選句は全校で約15編を選んでしたが、これが上学年に偏るというのだ。そこで、第5回目は、上学年と下学年の部に分け実施。各部約10編、合計約20編の作品を入選句とした。これで、下学年の児童の入選のチャンスが増えた。

第6回は、卒業生の部を前々から計画していたので、表に示したように3部構成の俳句大会となった。これらの改善によって、入選のチャンスは増えたが、1回も載らない児童の思いをどう受けとめるかは第3期の課題となった。

この2期は、様々なコンクールでの入賞ラッシュが続いた。平成27年度は文芸的なコンクールの入賞者は延べ66名にも上った。



職員玄関に掲示し入賞者を称揚する

(3) 第3期「高める時期」の実践について

平成28年度が始まった。第3期の課題は「1回も載らない児童の思いをどう受けとめるか」だ。第1回目と第2回目は、「2・3年の部と上学年の部」の二つの部に分けて実施した。1年生は10月からの参加とすることにした。しかし、やはり「選ばれた人だけでなく、各学年が一人ずつ考えた俳句を載せたものでもよいではないか。7月は4年生、8月は5年生とか…」という意見が出てきた。

この意見を採用すると、確かに全員の作品は掲載することはできるが、参加率が下がったり盛り上がり欠けたりすることも予想された。協議を重ね、平成28年度の全校俳句大会の年間計画を下記のように修正し直した。

平成28年度 全校俳句大会実施計画

平成28年7月修正

月	俳句大会	内容 等
4		年度初めのため実施せず。
5	第1回	2・3年の部、上学年の部で実施。クラス代表で句会。3句を選句。
6	第2回	2・3年の部、上学年の部で実施。クラス代表で句会。3句を選句。

7	第3回	5・6年の部。5・6年生全員の61名の作品を掲載。5句を選句。
8		夏期休業中のため実施せず。
9	第4回	3・4年の部。3・4年生全員の58名の作品を掲載。5句を選句。
10	第5回	1・2年の部。1・2年生全員の31名の作品を掲載。4句を選句。
11	第6回	全学年、クラス代表による句会。3句を選句。
12	第7回	5・6年の部。全5・6年生61名の作品を掲載。5句を選句。
1	第8回	3・4年の部。全3・4年生58名の作品を掲載。5句を選句。
2	第9回	1・2年の部。全1・2年生31名の作品を掲載。4句を選句。
3	第10回	6年、1～5年の部。クラス代表による句会。3句を選句。

来年度以降は、1月を休止とし、クラス代表による句会を3回、2学年全員の作品が載る句会を6回実施すると、一人当たり年間5回の句会を経験することとなる。間には2～3か月の休みも取ることにとなり、よいバランスで全校俳句大会を実施することができる。

2学年全員が参加する句会を保護者はどのように受け止めたのであろうか。

- ・今までは、「俳句載ってる?」「載ってない」の会話で終わっていましたが、今回は全員の作品が載っているということで、まず我が子の俳句を探すことから始まりました。「いい俳句だけど選べられないな」と、今までより会話が楽しめたのでよかったです。
- ・全員の句があり、数が多くて選ぶのが大変でしたが、一人一人の個性が出ていて楽しく選べました。自分の句があることもあり、子どもも励みになると思います。選ばれた句会もよいですが、全員のほうが私はよいと思います。
- ・今回は全員の句が載っていたので、句会の第2グラウンドとして自分の句はどれか当ててい

く……ということをして家族で楽しみました。意外にみんな当てられず盛り上がりました。時には全員の句が載っていてもいいなと思いました。

- ・選ばれた人だけでなく、全員の作品があるのもいいですね。
- ・いつもよりもたくさんあって、五つも選べたので楽しかったです。等々

否定的な意見はなく、全員の作品が載る句会を支持する意見が多かった。代表による句会と全員参加の句会とのバランスのよい組み合わせが大切であることが確認できた。

全校俳句大会の内容も、子どもたちが創作する俳句や短歌も表現意識も高まってきた第3期であった。

(4) 児童の称揚について

全校俳句大会や各種コンクール等でよい成績を収めた児童は大いにほめてそのがんばりを認めてやりたいと思った。

① 給食時間の校内放送

結果が分かり、全校俳句大会用の学校だよりが出来上がると、配布当日の給食時間に校内放送で成績を発表することになっている。実は、この放送は校長が担当しているのだが、全校が大変盛り上がる。「優秀賞、2年生…」と言おうものなら2年生から大歓声上がり、「優良賞、5年…」と言えば5年生から大歓声起きる。放送室は教室棟から少し離れているのだが、子どもたちの大歓声が放送室に聞こえてくるのだ。

② 全校俳句大会用の学校だよりを発行

学校だよりは毎月下旬に発行しているが、全校俳句大会を実施したときには特集号の形で発行している。紙面は、俳句大会の結果と校長による講評、保護者の感想等で構成をしている。この学校だよりは、児童のがんばりを発信する上でとても重要な役割を果たしている。大変好評で、学校と保護者・地域との結びつきを強くするために大いに役立っている。もともと保護者・地域は学校に対し協力的であったが、ここ

1年間以上に渡って児童のがんばりを発信し続けていると、さらに協力的になってきた。児童のがんばりは学校のがんばりである。それが学校だよりによって保護者・地域に伝播していくのである。喜ばしい限りである。

③ 職員玄関前に掲示する

さらには、入賞者の名前、顔写真、作品（俳句や短歌のみ）を大判の赤色の画用紙上に載せ掲示した。これは、児童の称揚とともに、来校者へのアピールをねらったものである。本校に來られる保護者、地域の方、教育関係者、業者、報道機関の方々等々に向け、本校の取り組みとして、アピールし続けた。

平成27年4月、私は「各種コンクール・大会等で60人以上の入賞者を出す」ことをマニフェストとして宣言した。結果は60人をはるかに超え180人に上った。内、文芸的なコンクールでの入賞者は延べ66人だった。

平成28年4月、「今年は入賞者100人以上」をマニフェストとした。10月現在、入賞者は82名。その内文芸的なコンクールでの入賞者は22名に上っている。

第2回全校俳句大会の結果

二・三年の部 最優秀賞 一位
あゆみ君は水上市がっこい 3年 塚田真菜さん 30票

最優秀賞 (3年)

二位 小ぎくもがひかて響りのマントラ 2年 橋本真菜さん 27票
三位 かもがゆのうでやうにのこ 3年 橋本真菜さん 24票

最優秀賞 (4年)

一位 かもがゆのうでやうにのこ 2年 橋本真菜さん 27票
二位 かもがゆのうでやうにのこ 3年 橋本真菜さん 24票
三位 かもがゆのうでやうにのこ 4年 橋本真菜さん 21票

最優秀賞 (5年)

一位 かもがゆのうでやうにのこ 2年 橋本真菜さん 27票
二位 かもがゆのうでやうにのこ 3年 橋本真菜さん 24票
三位 かもがゆのうでやうにのこ 4年 橋本真菜さん 21票

最優秀賞 (6年)

一位 かもがゆのうでやうにのこ 2年 橋本真菜さん 27票
二位 かもがゆのうでやうにのこ 3年 橋本真菜さん 24票
三位 かもがゆのうでやうにのこ 4年 橋本真菜さん 21票

実際の学校だより（表面）



職員玄関に掲示し児童を称揚する。53ページも参照

(5) ノーメディアデーと参加人数について

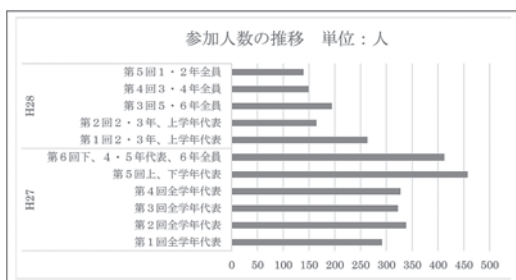
全校俳句大会は、毎月第1水曜日のノーメディアデーに合わせて実施している。「しないで、見ないで」という呼びかけだけではなく、何かのしかけを用意して家族団らんの時間を取り戻したいと考えた。全校俳句大会はそのしかけの一つでもある。しかし、句会を一体どれほどの人たちがどれほどの時間取り組んでくれるのか皆目検討がつかなかった。

統計を取ってみると、全校俳句大会の内容によって参加人数は変化した。ノーメディアタイムの平均時間はほとんどが20～25分の間であった。参加人数とノーメディアタイムの推移は次ページのグラフのとおりである。参加人数がもっと増えるしかけと、ノーメディアタイムが少しずつでも伸びるしかけの必要を感じた。また、句会は語彙指導にもつながること、親として言語環境を整えることになることも、引き続き保護者・地域へ積極的に呼びかけていきたい。

平成28年度の3～5回目は、上・中・下学年、2学年ごとの全員参加型にしたところ、参加人数が平成27年度の約半分に落ち込んでいる。また、平成28年度は27年に比べ減少している。句会自体がマンネリ化を招いているかもしれない。平成27年度の5・6回目の参加人数が多いのは、各部に参加等の重なりがあり延べ人数でカウントしたためである。

参加人数は変動が大きいのに、ノーメディアタイムは大きな変動はない。しっかりとファミリー句会を楽しんでいる家庭は時間をかけて団らんしているが、意識の低い家庭は団らんの場や句会に費やす時間が少ないという二極化が進んでいるかもしれない。

始めた当初は、1時間30分も句会を楽しんだ家庭も見られた。また直近の俳句大会では1時間以上句会を楽しみましたというご家族が5家族もあった。そういう面を今後も発信し、ノーメディアタイムの平均が30分を超えるような取り組みを考えていきたい。



4 研究の成果

全校俳句大会は約1年間かけて少しずつ形を整えつつある。これは、保護者や地域の意見を吸い上げながらよりよい形を求め続けてきた成果であり、すでに本校の特色ある教育風土として地域に根付いたと考えている。そして児童や学校のがんばりが地域に伝わるとともに、少しずつではあるが児童が「自信と活力」を身に付けつつあることを実感している。

9月末に行われた鳥取市の陸上大会では、選手宣誓に選ばれた本校児童が宣誓の最後を堂々と短歌で締めくくって拍手喝采を浴びた。また、終業式や始業式では、2年生の児童ががんばり発表で俳句を交えながら素晴らしい発表を行った。これらのことから、児童は日本文化である俳句や短歌に親しみ、今や抵抗なしに創作する力を有してきている。この度の学力学習状況調査でも、国語に関する質問紙調査では全項目で全国平均を上回った。20%近く高い項目も六つもあった。これらは日常的に俳句に親しむ教育風土の影響が大いにあると考えている。今後も特色ある取り組みとして意欲的に取り組んでいきたい。

5 今後の課題

課題もある。全校俳句大会のマンネリ化を防ぎ、参加人数やノーメディアタイムを増やしていくしかけを構築すること、また、この取り組みを地域にさらに広げたり児童の称揚の方法を新しく創出したりすることである。さらには、ノーメディアデーの一つの取り組みとして全国へ発信すること、どんな学校でもこうすれば「俳句で学校づくり」ができることを発信したいと考えている。こういう課題を一つ一つクリアしながら、さらに「俳句で学校づくり」を推進し特色ある教育風土を育てていきたい。

6 終わりに

今後、日本の社会は急激な変化を遂げていくことであろう。しかし、どんなに世の中が変わろうと、日本の心「大和心」を失わないでほしいと切に願う。今、俳句の取り組みを通じて、子どもたちは「命の大切さ」「家族の温かさ」「自然の美しさ」「郷土への愛」等を感じ取れるようになってきている。長じてそれは「神仏への感謝」「父母への報恩」「八百万の神の感得や畏敬の念」等につながっていくと確信する。子どもたちにはそういう「大和心」をもった日本人になってほしい。そのようなしなやかな精神をもった日本人こそが、世界から信頼される国際人となれるのではないだろうか。

遅々たる歩みではあるが、そういう日本人あるいは国際人を夢見て、今日も「俳句で学校づくり」を推進していきたい。

以上、鳥取県の小さな学校からの発信である。